

吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(2)

中 井 本 勝

I 序言

本稿は『三友健容博士古稀記念論文集 智慧のともしびーアビダルマ佛教の展開一』（中国・朝鮮半島・日本篇）に掲載した「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(1)」（以下、研究(1)）の続編である。本稿では研究(1)に引き続き、『論疏』における『法華論』の正体分の初めから、正体分の通釈一品までの校訂テキスト並びにそれに基づく訓読訳を提示する。凡例は研究(1)に準ずる。該当箇所の科文は下記の通りである。

〔科文〕

5-2. 正体分

5-2-1. 正明論体

5-2-1-1. 二経同異

5-2-1-2. 明論製作不同

5-2-2a. 天親大開此経

5-2-2b. 問答

5-2-2-1. 釈初品大開

5-B-1. 七分

5-B-1-1. 牒経

5-B-1-1-1. 牒序分経

5-2-2-2a. 牒衆成就分

5-B-1-1-2. 牒衆分經

5-2-2-2b. 菩薩中亦六門

5-2-2-2c. 論釈就文

5-B-1-2. 論釈

5-B-1-2-1. 通釈一品

5-2-2-2d. 就初又二句

5-B-1-2-1-1. 一部之通号

5-B-1-2-1-2. 一部之通称

II 校訂テキストと訓読訳

5-2. 正体分

5-2-1. 正明論体

〔校訂テキスト〕(A. 5r7-v2・O. 5v4-5・S. om.・M. 5v2-4・D. 150vb3-5・T. 786a22-24・X. 731a12-14)

經曰如是我聞。此是第二正明論體。但論略難明。今引二門敘其體例。一辨二經同異。二敘斯論⁽¹⁾製作之方。

〔訓読訳〕

經に「如是我聞」と曰うは、此れは是れ第二に正しく論體を明かす。但だ論は略にして明らかめ難し。今、二門を引きて其の體例を敘ぶ。一には二經の同異を辨ず。二には斯の論の製作の方を敘ぶ。

5-2-1-1. 二經同異

〔校訂テキスト〕(A. 5v2-6v2・O. 5v6-6v6・S. om.・M. 5v4-6r9・D. 150vb5-ra2・T. 786a24-b12・X. 731a14-b5)

二經同異者。即羅什所譯⁽²⁾經及⁽³⁾留支所出帶論⁽⁴⁾之經。其文不同。⁽⁵⁾凡⁽⁶⁾有五

種。一者舊經略論經⁽⁷⁾廣。如舊經歎羅漢德唯⁽⁸⁾有五句。論經有十六⁽⁹⁾句。或可⁽¹⁰⁾梵本⁽¹¹⁾廣略不同。或可聲聞常衆無會不集。處⁽¹²⁾處歎之。故羅什略歎其德也。天親欲示解一經歎德。令⁽¹³⁾識衆經歎德之意。故廣說也。二舊經廣而論經略。如方便品。舊經爲⁽¹⁴⁾十句。謂如是相如是性等。論經唯⁽¹⁵⁾有五⁽¹⁶⁾門。當是天親⁽¹⁷⁾以略攝廣⁽¹⁸⁾故也。三二經⁽¹⁹⁾同無廣略。⁽²⁰⁾如歎菩薩德。四品次前後。舊經屬累在藥王之前。論經在普賢之⁽²¹⁾後。羅什依於義意。是故在前。天親同經常法。所以⁽²²⁾在⁽²³⁾後。五名義不同。舊經稱⁽²⁴⁾六十二億恒⁽²⁵⁾河沙菩薩。論經稱六十⁽²⁶⁾二億恒河沙佛。羅什依經文譯之。故云菩薩。論取義意歎釋其福正等。顯初地菩薩得眞如法身故⁽²⁷⁾即是佛。以觀音與六十二億法身不二。故言福平等。所以稱佛。

〔訓読訳〕

二經の同異とは、即ち[鳩摩]羅什の所譯の『[法華]經』及び[菩提]留支の所出の帶論の『[法華]經』は其の文同じからず。

凡そ五種有り。

一には、舊經は略にして論經は廣し。舊經は羅漢の德を歎ずるに唯だ五句のみ有り。論經は十六句有るが如し。或いは梵本の廣略の不同なるべし。或いは聲聞の常に衆會として集まらざること無ければ、處處に之れを歎ず。故に[鳩摩]羅什は其の德を歎ずることを略すべきなり。天親は一經の歎德を解して衆經の歎德の意を識らしめんを示さんと欲す。故に廣說なり。

二には、舊經は廣にして論經は略なり。「方便品」の如き、舊經は十句と爲す。「如是相如是性」等を謂う。論經は唯だ五門のみ有り。當に是れ天親は略を以て廣を攝するが故なるべきなり。

三には、二經は同じくして廣略無し。菩薩の德を歎ずるが如し。

四には、品次の前後なり。舊經は「屬累[品]」は「藥王[品]」の前に在り、論經は「普賢[品]」の後に在り。[鳩摩]羅什は義意に依る。是の故に前に在り。天親は經の常法に同ず。所以に後に在り。

五には、名義同じからず。舊經は「六十二億恒河沙菩薩」と稱し、論經は「六

十二億恒河沙佛」と稱す。[鳩摩]羅什は經文に依りて之れを譯す。故に「菩薩」と云う。論は義意を取りて其の福正等なることを歎釋し、初地の菩薩は眞如法身を得るが故に、即ち是れ佛なることを顯わす。觀音は六十二億法身と不二なるを以ての故に福平等と言う。所以に「佛」と稱す。

5-2-1-2. 明論製作不同

[校訂テキスト] (A. 6v2-6 · O. 6v6-7r2 · S. om. · M. 6r9-v3 · D. 150ra2-6 · T. 786b12-16 · X. 731b5-9)

次明論⁽²⁸⁾製作不同者。⁽²⁹⁾如龍樹釋經。不預⁽³⁰⁾明章⁽³¹⁾門。⁽³²⁾至後追⁽³³⁾詔於前。天親釋此經凡有二意。一者預⁽³⁴⁾開起盡。如初品七分。二⁽³⁵⁾至後方陳。如⁽³⁶⁾論末云方便品凡有五門。蓋是聖人適時而用也。

[訓讀訳]

次に論の製作不同なるを明かすとは、龍樹の經を釋するが如きは、預め章門を明かさず、後に至りて追いて前を詔づく。天親の此の經を釋するに凡そ二意有り。

一には預め起盡を開く。初品の七分の如し。

二には後に至りて方に陳ぶ。『[法華]論』の末に「方便品に凡そ五門有り」と云うが如し。蓋し是れ聖人の時に適いて用いるなり。

5-2-2a. 天親大開此經

[校訂テキスト] (A. 6v6-7r2 · O. 7r2-5 · S. om. · M. 6v3-7 · D. 151ra6-10 · T. 786b16-21 · X. 731b9-13)

天⁽³⁷⁾親大開此經凡有三十二章。⁽³⁸⁾所言三十二者。即序品七分方便品五門謂十二也。⁽³⁹⁾從譬喩⁽⁴⁰⁾品⁽⁴¹⁾竟寶塔品。破十種病利益十人即十⁽⁴²⁾段也。⁽⁴³⁾從藥草⁽⁴⁴⁾竟一經明十無上。⁽⁴⁵⁾又⁽⁴⁶⁾有十章。故⁽⁴⁷⁾合成三十二也。

〔訓読訳〕

天親は此の『法華經』を大開するに、凡そ三十二章有り。言う所の三十二とは、即ち「序品」の^[5-B-1]七分、「方便品」の^[5-B-2]五門の十二を謂うなり。「譬喻品」従り「寶塔品」を竟るまで十種の病を破して十人を利益す、即ち^[5-B-3]十段なり。「藥草[品]」従り一經を竟るまで^[5-B-4]十無上を明かす。又た、十章有るが故に合して三十二と成るなり⁽⁴⁸⁾。

5-2-2b. 問答

〔校訂テキスト〕(A. 7r2-8r2 · O. 7r5-8r7 · S. om. · M. 6v7-7v3 · D. 151ra10-b8 · T. 786b21-c10 · X. 731b13-c5)

問。初從⁽⁴⁹⁾火宅竟於寶塔所破十病。云何⁽⁵⁰⁾更從藥草竟一經明十無上耶。答。⁽⁵¹⁾付法藏經云。婆藪槃⁽⁵²⁾陀善解一切⁽⁵³⁾修多羅義。修多羅者凡有五義。一者顯示。謂顯示諸⁽⁵⁴⁾義故。如⁽⁵⁵⁾序品七⁽⁵⁶⁾段方便五門即顯⁽⁵⁷⁾示十二種義也。二涌⁽⁵⁸⁾泉。⁽⁵⁹⁾謂義⁽⁶⁰⁾味無盡故。如解譬喻竟於寶塔更從藥草⁽⁶¹⁾竟⁽⁶²⁾於一經。釋於後⁽⁶³⁾竟而追解於前示義味無盡。即涌⁽⁶⁴⁾泉義⁽⁶⁵⁾也。三⁽⁶⁶⁾出生。諸義⁽⁶⁷⁾出生故。如解第十⁽⁶⁸⁾無上勝功德⁽⁶⁹⁾力。⁽⁷⁰⁾歎經廣生功德無盡。即⁽⁷¹⁾出生義也。四者繩墨。裁諸⁽⁷²⁾邪⁽⁷³⁾顯正故。破十病名曰裁邪。顯十種義所謂顯⁽⁷⁴⁾正。五者結鬘⁽⁷⁵⁾貫穿諸佛⁽⁷⁶⁾法。⁽⁷⁷⁾則三十二章同爲顯一道唯教一人。如結⁽⁷⁸⁾花鬘令身首嚴⁽⁷⁹⁾飾也。又釋後竟而更追解前者。聖人內有無⁽⁸⁰⁾礙之智。外有無方之辨。故能自在⁽⁸¹⁾而⁽⁸²⁾譯。又從前⁽⁸³⁾譯向後示鳥⁽⁸⁴⁾眼疾轉。⁽⁸⁵⁾從後向前如師子⁽⁸⁶⁾返⁽⁸⁷⁾擲。又前⁽⁸⁸⁾譯經竟有疑者。重問之。⁽⁸⁹⁾故後更釋之。如今⁽⁹⁰⁾人義深後章別有⁽⁹¹⁾料簡重⁽⁹²⁾也。蓋是外國聖人⁽⁹³⁾製論之大體也。

〔訓読訳〕

問う、初めに「火宅」従り「寶塔[品]」を竟るまで所破の十病あり。云何んぞ更に「藥草[品]」従り一經を竟るまで十無上を明かすや。

答う、『付法藏經』に云わく、「婆藪槃陀は善く一切修多羅の義を解す」と。

修多羅とは、凡そ五義有り。

一には顯示なり。諸義を顯示するを謂うが故に、「序品」の七段、「方便[品]」の五門の即ち十二種の義を顯示するが如きなり。

二には涌泉なり。意味の無盡なるを謂うが故に、「譬喩[品]」より「寶塔[品]」を竟るまで更に「藥草[品]」従り一經を竟るまでを解し、後を釋し竟りて追いて前を解し、意味の無盡なるを示すが如し。即ち涌泉の義なり。

三には出生なり。諸義の出生するが故に、第十無上勝功德力を解するに經を歎ずること廣なれば、功德を生ずること無盡なるが如し。即ち出生の義なり。

四には繩墨なり。諸の邪を裁き正を顯わすが故に、十病を破するを名づけて裁邪と曰う。十種の義を顯わすは所謂顯正なり。

五には結鬘なり。諸佛の法を貫穿するは則ち三十二章同じく一道を顯わすと爲し唯だ一人のみ教う。花鬘を結びて身首を嚴飾せしめんが如きなり。

又た、後を釋し竟りて更に追いて前を解すとは、聖人は内に無礙の智有り、外に無方の辨有り。故に能く自在にして譯す。

又た、前従り譯して後に向かうは鳥眼の疾く轉するを示し、後従り前に向かう師子の返擲するが如し。

又た、前に經を譯し竟りて疑者有り。重ねて之れを問う。故に後に更に之れを釋す。今人の義の深きとき、後章に別に料簡の重なること有るが如きなり。蓋し是れ外國の聖人の論を製するの大體なり。

5-2-2-1. 积初品大開

[校訂テキスト] (A. 8r24・O. 8r7-v1・S. om.・M. 7v3-5・D. 151rb8-10・T. 786c10-12・X. 731c5-7)

就釋初品大開爲二。一者牒⁽⁹⁴⁾經。二者論⁽⁹⁵⁾釋。牒經⁽⁹⁶⁾但牒二章。謂序分經⁽⁹⁷⁾衆分經。牒序分經始從如是終竟⁽⁹⁸⁾崛山。⁽⁹⁹⁾即⁽¹⁰⁰⁾牒經序⁽¹⁰¹⁾分也。

〔訓読訳〕

^[5-B-1]初品を釋するに就きて大開して二と爲す。^[5-B-1-1]一には牒經、^[5-B-1-2]二には論譯なり。牒經は但だ二章のみを牒す。序分經と衆分經とを謂う。^[5-B-1-1]序分經を牒すとは始め「如是」従り「崛山」に終竟るまでは即ち經の序分を牒するなり。

5-2-2-2a. 牒衆成就分

〔校訂テキスト〕(A. 8r4-v5 · O. 8v2-9r2 · S. om. · M. 7v8-8r6 · D. 151rb13-va3 · T. 786c14-24 · X. 731c10-18)

⁽¹⁰²⁾與大比⁽¹⁰³⁾丘下。第二⁽¹⁰⁴⁾牒⁽¹⁰⁵⁾衆成就分⁽¹⁰⁶⁾也。⁽¹⁰⁷⁾什譯經有三。一聲聞。二菩薩。⁽¹⁰⁸⁾三人⁽¹⁰⁹⁾天衆。⁽¹¹⁰⁾今但牒前⁽¹¹¹⁾二。⁽¹¹²⁾以二⁽¹¹³⁾衆有歎德。今欲釋之。故⁽¹¹⁴⁾牒以人天⁽¹¹⁵⁾衆無歎德。又易解兼餘⁽¹¹⁶⁾經已釋。故不牒之。就牒⁽¹¹⁷⁾二衆即二。牒聲聞衆中舊經有比丘⁽¹¹⁸⁾比丘尼。今但牒⁽¹¹⁹⁾比丘。⁽¹²⁰⁾比丘衆中有二。一顯名。二密行。⁽¹²¹⁾今但牒顯名不牒密行。⁽¹²²⁾竝爲易解兼不歎德故也。比丘中有六。一標通號。二唱數。三明位。四歎德。五列名。六總結。今但列初四。不列後⁽¹²³⁾二。而論釋中不釋初一通⁽¹²⁴⁾號及第五列名。

〔訓読訳〕

「與大比丘」の下は、第二に^[5-B-1-2]衆成就分を牒するなり。〔鳩摩羅〕什は經を譯するに三有り。一には聲聞、二には菩薩、三には人天衆なり。

今、但だ前の二のみを牒す。二衆を以て德を歎ずること有り。今、之れを釋せんと欲す。故に牒するに人天衆を以てして德を歎ずること無し。

又た、解し易く兼ねて餘經に已に釋す。故に之れを牒せず。二衆を牒するに就いて即ち二あり。聲聞衆を牒する中、舊經に比丘・比丘尼有り。今は但だ比丘のみを牒す。

比丘衆の中に二有り。一には顯名、二には密行なり。今は但だ顯名を牒して密行を牒せず。竝びに解し易く兼ねて德を歎ぜざるが爲めの故なり。

比丘の中に六有り。一には通號を標し、二には唱數、三には明位、四には歎德、五には列名、六には總結なり。今、但だ初めの四のみを列して後の二を列せず。而して論釋の中には初めの一の通號及び第五の列名を釋せず。

5-2-2-2b. 菩薩中亦六門

〔校訂テキスト〕(A. 8v5-7・O. 9r2-4・S. om.・M. 8v2-4・D. 151va9-11・T. 786c29-787a3・X. 732a6-8)

⁽¹²⁵⁾菩薩中亦⁽¹²⁶⁾六⁽¹²⁷⁾門。一通號。二唱數。三明位。四歎德。五列名。六總結。而⁽¹²⁸⁾後論釋中不釋初一及以⁽¹²⁹⁾後二。至文當顯。

〔訓読訳〕

菩薩の中も亦た六門なり。一には通號、二には唱數、三には明位、四には歎德、五には列名、六には總結なり。而して後に論釋の中の初めの一及び以後の二を釋せず。文に至りて當に顯わるべし。

5-2-2-2c. 論釈就文

〔校訂テキスト〕(A. 8v7-9r1・O. 9r4-5・S. om.・M. 8v10-9r1・D. 151va17-18・T. 787a9-11・X. 732a14-15)

⁽¹³⁰⁾論曰下。第二⁽¹³¹⁾論釋就文爲二。第一通⁽¹³²⁾釋一品。凡⁽¹³³⁾爲七門。第二別列七門。

〔訓読訳〕

「論曰」の下は、^[5-B-1-2]第二に論釋は文に就いて二と爲す。^[5-B-1-2-1]第一に通じて一品を釋す。凡そ七門と爲す。^[5-B-1-2-2]第二に別して七門を列す。

5-2-2-2d. 就初又二句

〔校訂テキスト〕(A. 9r1-4・O. 9r6-v2・S. om.・M. 9r3-6・D. 151vb2-5・T. 787a13-17・X. 732a17-20)

⁽¹³⁴⁾就初又二句。此法門者一部之⁽¹³⁵⁾通號也。初第一品者一章之別稱也。七種皆稱功德者。此之七種皆能⁽¹³⁶⁾顯道利物故竝云功德。一⁽¹³⁷⁾一章中明義具足無⁽¹³⁸⁾餘。不可破⁽¹³⁹⁾壞故云成⁽¹⁴⁰⁾就。

〔訓読訳〕

初めに就いて又た二句あり。

「此法門」とは^[5-B-1-2-1-1]一部の通號なり。

「初第一品」とは^[5-B-1-2-1-2]一章の別稱なり。

「七種皆稱功德」とは、此の七種は皆な能く道を顯わし、物を利するが故に、竝びに功德と云う。一一の章の中に義を明かすことを具足して餘無し。破壊すべからざるが故に成就と云う。

Ⅲ 結語

以上、本稿では、『論疏』における『法華論』の正体分の初めから、正体分の「通釈一品」に対する注釈箇所、校訂テキスト並びにそれに基づく訓読訳を提示した。

参考文献 (追加)

奥野光賢

[2005] 「吉蔵の法華経観」『駒澤短期大学研究紀要』33: (221)-(233).

中井本勝 (藤野泰二、中井泰二)

[2015] 「吉蔵による『法華論』帰敬偈の理解について」『佛教学論集』31/32: (1)-(9).

[2016] 「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(1)」『三友健容博士古稀記念論文集 智慧のともしびーアビダルマ佛教の展開一』中国・朝鮮半島・日本篇, 山喜房佛書林.

〈注〉

(1) 甲本・乙本には「制」(A. vol.1 p.5v l.2; O. vol.1 p.5v l.5) とあるが、甲本には「製」との校正があるため、甲本・乙本以外の諸本には「製」(M. vol.1 p.vol.1

- l4; D.1-74-2 p.150vb l5; T.40 no.1818 p.786a l24; X.46 no.789 p.731a l14) とあるのに従う。
- (2) 乙本には「無論經」(O. vol.1 p.5v l6) とあるが、乙本以外の諸本には「經」(A. vol.1 p.5v l3; M. vol.1 p.5v l5; D.1-74-2 p.150v l6; T.40 no.1818 p.786a l25; X.46 no.789 p.731a l15) とあるのに従う。
- (3) 甲本には「流」(A. vol.1 p.5v l3) とあるが、甲本以外の諸本には「留」(O. vol.1 p.5v l6; M. vol.1 p.5v l5; D.1-74-2 p.150vb l6; T.40 no.1818 p.786a l25; X.46 no.789 p.731a l15) とあるのに従う。
- (4) 乙本 (O. vol.1 p.5v l7) は破損のため、「之」を欠く。
- (5) 乙本 (O. vol.1 p.5v l7) は破損のため、「凡有五種一者舊經」を欠く。
- (6) 甲本には「爲」(A. vol.1 p.5v l3) とあるが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「有」(M. vol.1 p.5v l6; D.1-74-2 p.150vb l7; T.40 no.1818 p.786a l26; X.46 no.789 p.731a l16) とあるのに従う。正徳本・『統藏經』・『新統藏』には「有一作爲」(M. vol.1 p.5v l6; D.1-74-2 p.150vb l7; X.46 no.789 p.731 n.3) との、『大正藏』には「有 = 爲[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.6) との注記がある。
- (7) 乙本 (O. vol.1 p.5v l7 - p.6r l1) は破損のため、「廣如舊經」を欠く。
- (8) 乙本 (O. vol.1 p.6r l1) は破損のため、「有五句論經有十」を欠く。
- (9) 乙本 (O. vol.1 p.6r l1) は破損のため、「句或」を欠く。
- (10) 乙本 (O. vol.1 p.6r l1) は破損のため、「梵」を欠く。
- (11) 乙本 (O. vol.1 p.6r l1) は破損のため、「廣」を欠く。
- (12) 甲本・乙本の「處」(A. vol.1 p.6r l2; O. vol.1 p.5v l6) は踊り字となっている。
- (13) 甲本・乙本以外の諸本には「譏」(M. vol.1 p.5v l9; D.1-74-2 p.150v l10; T.40 no.1818 p.786b l1; X.46 no.789 p.731a l19) とあるが、甲本・乙本には「識」(A. vol.1 p.5v l7; O. vol.1 p.6r l3) とあるのに従う。正徳本・『統藏經』・『新統藏』には「譏一作識」(M. vol.1 p.5v l9; D.1-74-2 p.150vb l10; X.46 no.789 p.731 n.4) との、『大正藏』には「譏 = 識[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.7) との注記がある。
- (14) 乙本 (O. vol.1 p.6r l5) は破損のため、「十句」を欠く。
- (15) 甲本には「爲」(A. vol.1 p.6r l2) とあるが、甲本以外の諸本には「有」(O. vol.1 p.6r l5; M. vol.1 p.6r l1; D.1-74-2 p.150vb l12; T.40 no.1818 p.786b l3; X.46 no.789 p.731a l21) とあるのに従う。正徳本・『統藏經』・『新統藏』には「有一作爲」(M. vol.1 p.6r l1; D.1-74-2 p.150vb l12; X.46 no.789 p.731 n.5) との、『大正藏』には「有 = 爲[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.6) との注記がある。
- (16) 甲本・乙本には「亦」(A. vol.1 p.6r l2; O. vol.1 p.6r l5) とあるが、甲本には「門」との校正があるため、甲本・乙本以外の諸本には「門」(M. vol.1 p.6r l1;

- D.1-74-2 p.150vb l.12; T.40 no.1818 p.786b l.3; X.46 no.789 p.731a l.21) とあるのに従う。
- (17) 乙本 (O. vol.1 p.6r l.5) は破損のため、「以」を欠く。
- (18) 甲本・乙本には「知」(A. vol.1 p.6r l.3; O. vol.1 p.6r l.6) とあるが、甲本には「故」との校正があるため、甲本・乙本以外の諸本には「故」(M. vol.1 p.6r l.2; D.1-74-2 p.150vb l.13; T.40 no.1818 p.786b l.4; X.46 no.789 p.731a l.22) とあるのに従う。
- (19) 乙本 (O. vol.1 p.6r l.6) は破損のため、「同」を欠く。
- (20) 甲本の「也」(A. vol.1 p.6r l.3) には「如」との校正があるため、甲本以外 (乙本は破損) の諸本には「如」(M. vol.1 p.6r l.2; D.1-74-2 p.150vb l.13; T.40 no.1818 p.786b l.5; X.46 no.789 p.731a l.22) とあるのに従う。乙本 (O. vol.1 p.6r l.6) は破損のため、「如」を欠く。
- (21) 乙本 (O. vol.1 p.6r l.7) は破損のため、「後羅」を欠く。
- (22) 甲本・乙本には「其」(A. vol.1 p.6r l.5; O. vol.1 p.6v l.1) とあるが、甲本には「在」との校正があるため、甲本・乙本以外の諸本には「在」(M. vol.1 p.6r l.5; D.1-74-2 p.150vb l.16; T.40 no.1818 p.786b l.7; X.46 no.789 p.731b l.1) とあるのに従う。
- (23) 乙本 (O. vol.1 p.6v l.1) は破損のため、「後五」を欠く。
- (24) 乙本 (O. vol.1 p.6v l.2) は破損のため、「六十」を欠く。
- (25) 乙本 (O. vol.1 p.6v l.2) は破損のため、「河」を欠く。
- (26) 乙本 (O. vol.1 p.6v l.3) は破損のため、「二億」を欠く。
- (27) 甲本・乙本には「云」(A. vol.1 p.6v l.1; O. vol.1 p.6v l.4) とあるが、甲本には「即」との校正があるため、甲本・乙本以外の諸本には「即」(M. vol.1 p.6r l.8; D.1-74-2 p.151ra l.1; T.40 no.1818 p.786b l.11; X.46 no.789 p.731b l.4) とあるのに従う。
- (28) 乙本には「制」(O. vol.1 p.6v l.6) とあるが、乙本以外の諸本には「製」(A. vol.1 p.6v l.3; M. vol.1 p.6r l.9; D.1-74-2 p.151ra l.2; T.40 no.1818 p.786b l.12; X.46 no.789 p.731b l.5) とあるのに従う。
- (29) 乙本 (O. vol.1 p.6v l.6) は破損のため、「如龍」を欠く。
- (30) 甲本・乙本以外の諸本には「開」(M. vol.1 p.6r l.10; D.1-74-2 p.151r l.3; T.40 no.1818 p.786b l.13; X.46 no.789 p.731b l.6) とあるが、甲本・乙本には「明」(A. vol.1 p.6v l.3; O. vol.1 p.6v l.6) とあるのに従う。正徳本・『続蔵経』・『新続蔵』には「開一作明」(M. vol.1 p.6r l.10; D.1-74-2 p.151r l.3; X.46 no.789 p.731 n.6) との、『大正蔵』には「開＝明[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.8) との注記がある。

- (31) 正徳本 (M. vol.1 p.6r l.10) は破損のため、「門」を欠く。
- (32) 乙本 (O. vol.1 p.6v l.7 - 7r l.1) は破損のため、「至後追詔於前天釋經此經凡有二意一者預開起盡如初品七分」を欠く。
- (33) 正徳本・『続藏経』・『新続藏』には「詔一作詔」(M. vol.1 p.6r l.10; D.1-74-2 p.151ra l.3; X.46 no.789 p.731 n.7) との、『大正藏』には「詔^イ」(T.40 no.1818 p.786 n.9) との注記がある。
- (34) 正徳本 (M. vol.1 p.6v l.1) は破損のため、「開」を欠く。
- (35) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.1-2) は破損のため、「至後方陳如論末云方便品凡有五門蓋」を欠く。
- (36) 甲本の「論」(A. vol.1 p.6v l.5) は添字であるが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「論」(M. vol.1 p.6v l.2; D.1-74-2 p.151ra l.5; T.40 no.1818 p.786b l.15; X.46 no.789 p.731b l.8) とあるのに従う。
- (37) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.2) は破損のため、「親大」を欠く。
- (38) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.3) は破損のため、「所言」を欠く。
- (39) 甲本・乙本には「従」(A. vol.1 p.6v l.7; O. vol.1 p.7r l.3) を欠くが、甲本・乙本以外の諸本には「従」(M. vol.1 p.6v l.4; D.1-74-2 p.151ra l.7; T.40 no.1818 p.786b l.18; X.46 no.789 p.731b l.10) とあるのに従う。正徳本には「従一無」(M. vol.1 p.6v l.4) との、『続藏経』・『新続藏』には「従一本無」(D.1-74-2 p.151ra l.8; X.46 no.789 p.731 n.8) との、『大正藏』には「〔従^イ」(T.40 no.1818 p.786 n.10) との注記がある。
- (40) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.4) は破損のため、「品竟寶」を欠く。
- (41) 甲本・乙本には「竟」(A. vol.1 p.6v l.7) を欠くが、甲本(乙本は破損)以外の諸本には「竟」(M. vol.1 p.6v l.5; D.1-74-2 p.151ra l.8; T.40 no.1818 p.786b l.18; X.46 no.789 p.731b l.11) とあるのに従う。正徳本には「竟一無」(M. vol.1 p.6v l.5) との、『続藏経』・『新続藏』には「竟一本無」(D.1-74-2 p.151ra l.8; X.46 no.789 p.731 n.9) との、『大正藏』には「〔竟^イ」(T.40 no.1818 p.786 n.11) との注記がある。
- (42) 正徳本には「段一數」(M. vol.1 p.6v l.5) との、『続藏経』・『新続藏』には「段一作數」(D.1-74-2 p.151v l.8; X.46 no.789 p.731 n.10) との、『大正藏』には「段=數^イ」(T.40 no.1818 p.786 n.12) との注記がある。
- (43) 甲本には「譬喩従」(A. vol.1 p.7r l.1) とあるが、甲本以外の諸本には「従」(O. vol.1 p.7r l.4; M. vol.1 p.6v l.5; D.1-74-2 p.151ra l.8; T.40 no.1818 p.786b l.19; X.46 no.789 p.731b l.11) とあるのに従う。
- (44) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.5) は破損のため、「竟一經明」を欠く。
- (45) 甲本には「又」(A. vol.1 p.7r l.1) を欠くが、「又」との添字があるため、甲本

- 以外の諸本には「又」(O. vol.1 p.7r l.5; M. vol.1 p.6v l.6; D.1-74-2 p.151ra l.9; T.40 no.1818 p.786b l.20; X.46 no.789 p.731b l.12) とあるのに従う。
- (46) 甲本には「有」(A. vol.1 p.7r l.1) とあるが、「成」との校正があり、甲本以外の諸本には「有」(O. vol.1 p.7r l.1; M. vol.1 p.6v l.6; D.1-74-2 p.151ra l.9; T.40 no.1818 p.786b l.20; X.46 no.789 p.731b l.12) とあるのに従う。正徳本・『続蔵経』・『新続蔵』には「有一作成一作明」(M. vol.1 p.6v l.6; D.1-74-2 p.151ra l.9; X.46 no.789 p.731 n.11) との、『大正蔵』には「有=成[㊦]、明[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.13) との注記がある。
- (47) 正徳本・『続蔵経』・『新続蔵』には「合一無」(M. vol.1 p.6v l.6; D.1-74-2 p.151ra l.9; X.46 no.789 p.731 n.12) との、『大正蔵』には「〔合〕[㊦]-[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.14) との注記がある。
- (48) 丸山孝雄[1980: 201-202]および奥野光賢[2002: 11-13]を参照。
- (49) 乙本 (O. vol.1 p.7r ll.5-6) は破損のため、「火宅竟」を欠く。
- (50) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.6) は破損のため、「更」を欠く。
- (51) 吉迦夜・曇曜訳『付法蔵因縁伝』巻第六には「婆修槃陀白言受教。従是以後宣通經藏。以多聞力智慧辯才。如是功德而自莊嚴。善解一切修多羅義。」(T.50 no.2058 p.321b ll.25-28) とある。また、吉蔵撰『中論序疏』には「付法藏云。婆藪槃豆善解一切修多羅義。」(T.42 no.1824 p.5a ll.9-10) とある。また、吉蔵撰『百論序疏』には「付法藏經云。婆藪槃陀善解一切修多羅義。」(T.42 no.1827 p.234b ll.27-28) とある。
- (52) 正徳本・『続蔵経』・『新続蔵』には「陀一作逗」(M. vol.1 p.6v l.8; D.1-74-2 p.151ra l.11; X.46 no.789 p.731 n.13) との、『大正蔵』には「陀=逗[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.15) との注記がある。
- (53) 乙本 (O. vol.1 p.7r l.7) は破損のため、「修多」を欠く。
- (54) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.1) は破損のため、「義故」を欠く。
- (55) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.2) は破損のため、「序品」を欠く。
- (56) 乙本には「數」(O. vol.1 p.7v l.2) とあるが、乙本以外の諸本には「段」(A. vol.1 p.7r l.5; M. vol.1 p.6v l.10; D.1-74-2 p.151ra l.13; T.40 no.1818 p.786b l.25; X.46 no.789 p.731b l.16) とあるのに従う。
- (57) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.2) は破損のため、「示」を欠く。
- (58) 乙本には「泉」(O. vol.1 p.7v l.2) の前に一字あるが、判読不能である。
- (59) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.3) は破損のため、「謂」を欠く。
- (60) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.3) は破損のため、「味」を欠く。
- (61) 乙本には「終」(O. vol.1 p.7v l.3) とあるが、乙本以外の諸本には「竟」(A. vol.1 p.7r l.7; M. vol.1 p.7r l.2; D.1-74-2 p.151ra l.15; T.40 no.1818 p.786b l.27;

- X.46 no.789 p.731b l.18) とあるのに従う。
- (62) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.4) は破損のため、「於一」を欠く。
- (63) 乙本には「意」(O. vol.1 p.7v l.4) とあるが、乙本以外の諸本には「竟」(A. vol.1 p.7r l.7; M. vol.1 p.7r l.2; D.1-74-2 p.151ra l.15; T.40 no.1818 p.786b l.27; X.46 no.789 p.731b l.18) とあるのに従う。
- (64) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.5) は破損のため、「泉」を欠く。
- (65) 甲本には「也」(A. vol.1 p.7v l.1) を欠くが、甲本以外の諸本には「也」(O. vol.1 p.7v l.5; M. vol.1 p.7r l.3; D.1-74-2 p.151ra l.16; T.40 no.1818 p.786b l.28; X.46 no.789 p.731b l.19) とあるのに従う。
- (66) 乙本には「出・生・」(O. vol.1 p.7v l.5) とあるが、乙本以外の諸本には「出生」(A. vol.1 p.7v l.1; M. vol.1 p.7r l.3; D.1-74-2 p.151ra l.16; T.40 no.1818 p.786b l.28; X.46 no.789 p.731b l.19) とあるのに従う。
- (67) 乙本には「出生」(O. vol.1 p.7v l.5) を欠くが、乙本以外の諸本に「出生」(A. vol.1 p.7v l.1; M. vol.1 p.7r l.3; D.1-74-2 p.151ra l.16; T.40 no.1818 p.786b l.28; X.46 no.789 p.731b l.19) とあるのに従う。
- (68) 甲本・乙本には「五」(A. vol.1 p.7v l.2; O. vol.1 p.7v l.5) とあるが、甲本・乙本以外の諸本には「無」(M. vol.1 p.7r l.4; D.1-74-2 p.151ra l.17; T.40 no.1818 p.786b l.29; X.46 no.789 p.731b l.20) とあるのに従う。
- (69) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.6) は破損のため、「力歎」を欠く。
- (70) 甲本には「歎」(A. vol.1 p.7v l.2) は添字であるが、甲本以外 (乙本は破損) の諸本には「歎」(M. vol.1 p.7r l.4; D.1-74-2 p.151ra l.17; T.40 no.1818 p.786b l.29; X.46 no.789 p.731b l.20) とあるのに従う。
- (71) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.6) は破損のため、「生義」を欠く。
- (72) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.7) は破損のため、「邪顯正故破十病名曰裁邪顯十種義所謂」を欠く。
- (73) 甲本の「顯」(A. vol.1 p.7v l.3) は添字であるが、甲本以外 (乙本は破損) の諸本には「顯」(M. vol.1 p.7r l.5; D.1-74-2 p.151ra l.18; T.40 no.1818 p.786c l.1; X.46 no.789 p.731b l.21) とあるのに従う。
- (74) 乙本 (O. vol.1 p.7v l.7) は破損のため、「正五者」を欠く。
- (75) 甲本の「貫」(A. vol.1 p.7v l.4) は添字であるが、甲本以外の諸本には「貫」(O. vol.1 p.8r l.2; M. vol.1 p.7r l.6; D.1-74-2 p.151rb l.1; T.40 no.1818 p.786c l.3; X.46 no.789 p.731b l.22) とあるのに従う。
- (76) 乙本 (O. vol.1 p.8r l.1-2) は破損のため、「法則三十二章同爲顯一道唯教一人」を欠く。
- (77) 甲本には「則」(A. vol.1 p.7v l.4) を欠くが、甲本以外 (乙本は破損) の諸本

- には「則」(M. vol.1 p.7r l.7; D.1-74-2 p.151rb l.2; T.40 no.1818 p.786c l.3; X.46 no.789 p.731b l.23)とあるのに従う。
- (78) 甲本・乙本以外の諸本には「華」(M. vol.1 p.7r l.7; D.1-74-2 p.151rb l.2; T.40 no.1818 p.786c l.4; X.46 no.789 p.731b l.23)とあるが、甲本・乙本には「花」(A. vol.1 p.7v l.5; O. vol.1 p.8r l.2)とあるのに従う。
- (79) 乙本(O. vol.1 p.8r l.2)は破損のため、「飾也」を欠く。
- (80) 甲本・乙本には「上」(A. vol.1 p.7v l.6; O. vol.1 p.8r l.3)とあるが、甲本・乙本以外の諸本には「礙」(M. vol.1 p.7r l.9; D.1-74-2 p.151rb l.4; T.40 no.1818 p.786c l.5; X.46 no.789 p.731c l.1)とあるのに従う。
- (81) 乙本(O. vol.1 p.8r l.4)は破損のため、「而譯」を欠く。
- (82) 甲本には「釋」(A. vol.1 p.7v l.6)とあるが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「譯」(M. vol.1 p.7r l.9; D.1-74-2 p.151rb l.4; T.40 no.1818 p.786c l.6; X.46 no.789 p.731c l.1)とあるのに従う。正徳本には「譯一作釋」(M. vol.1 p.7r l.9)との、『統藏經』・『新統藏』には「譯一作釋下同」(D.1-74-2 p.151rb l.4; X.46 no.789 p.731 n.14)との、『大正藏』には「譯=釋[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.16)との注記がある。
- (83) 乙本には「釋」(O. vol.1 p.8r l.4)とあるが、乙本以外の諸本には「譯」(A. vol.1 p.7v l.7; M. vol.1 p.7r l.10; D.1-74-2 p.151rb l.5; T.40 no.1818 p.786c l.6; X.46 no.789 p.731c l.2)とあるのに従う。正徳本には「譯一作釋」(M. vol.1 p.7r l.10)との、『大正藏』には「譯=釋[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.16)との注記がある。『統藏經』・『新統藏』には前注に「譯一作釋下同」(D.1-74-2 p.151rb l.4; X.46 no.789 p.731 n.14)との注記がある。
- (84) 甲本・乙本以外の諸本には「目」(M. vol.1 p.7r l.10; D.1-74-2 p.151rb l.5; T.40 no.1818 p.786c l.7; X.46 no.789 p.731c l.2)とあるが、甲本の「目」(A. vol.1 p.7v l.7)には「眼」との校正があり、乙本には「眼」(O. vol.1 p.8r l.4)とあるのに従う。
- (85) 正徳本(M. vol.1 p.7r l.10)は破損のため、「從後」を欠く。
- (86) 乙本(O. vol.1 p.8r l.5)は破損のため、「返擲又」を欠く。
- (87) 甲本の「打」(A. vol.1 p.7v l.1)には「擲」との校正があり、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「擲」(M. vol.1 p.7r l.10; D.1-74-2 p.151rb l.5; T.40 no.1818 p.786c l.7; X.46 no.789 p.731c l.2)とあるのに従う。
- (88) 乙本には「釋」(O. vol.1 p.8r l.5)とあるが、乙本以外の諸本には「譯」(A. vol.1 p.7v l.7; M. vol.1 p.7v l.1; D.1-74-2 p.151rb l.6; T.40 no.1818 p.786c l.7; X.46 no.789 p.731c l.3)とあるのに従う。正徳本には「譯一作釋」(M. vol.1 p.7v l.1)との、『大正藏』には「譯=釋[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.16)との注記がある。

- 『統蔵経』・『新統蔵』には前注に「譯一作釋下同」(D.1-74-2 p.151rb l.4; X.46 no.789 p.731 n.14) との注記がある。
- (89) 正徳本 (M. vol.1 p.7v l.1) は破損のため、「故後」を欠く。
- (90) 乙本 (O. vol.1 p.8r ll.5-6) は破損のため、「人義深」を欠く。
- (91) 甲本の「料」(A. vol.1 p.8r l.2) には「斷」との校正があるが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「料」(M. vol.1 p.7v l.2; D.1-74-2 p.151rb l.7; T.40 no.1818 p.786c l.9; X.46 no.789 p.731c l.4) とあるのに従う。正徳本には「斷當作料」(M. vol.1 p.7v l.2) との注記がある。乙本 (O. vol.1 p.8r l.6) は破損のため、「料」を欠く。
- (92) 乙本 (O. vol.1 p.8r l.6) は破損のため、「也」を欠く。
- (93) 甲本・乙本以外の諸本には「制論」(M. vol.1 p.7v l.2; D.1-74-2 p.151rb l.7; T.40 no.1818 p.786c l.9; X.46 no.789 p.731c l.4) とあり、甲本・乙本には「製論」(A. vol.1 p.8r l.2; O. vol.1 p.8r l.6) を欠くが、甲本には「製論」との校正があるのに従う。正徳本には「制一製」(M. vol.1 p.7v l.3) との、『統蔵経』・『新統蔵』には「制一作製」(D.1-74-2 p.151rb l.7; X.46 no.789 p.731 n.15) との、『大正蔵』には「制=製^⑧」(T.40 no.1818 p.786 n.17) との注記がある。
- (94) 甲本・乙本には「經」(A. vol.1 p.8r l.3; O. vol.1 p.8r l.7) を欠くが、甲本には「經」との添字があり、甲本・乙本以外の諸本には「經」(M. vol.1 p.7v l.3; D.1-74-2 p.151vb l.8; T.40 no.1818 p.786c l.10; X.46 no.789 p.731c l.5) とあるのに従う。
- (95) 甲本・乙本以外の諸本には「譯」(M. vol.1 p.7v l.3; D.1-74-2 p.151rb l.8; T.40 no.1818 p.786c l.11; X.46 no.789 p.731c l.5) とあるが、甲本・乙本には「釋」(A. vol.1 p.8r l.3; O. vol.1 p.8r l.7) とあるのに従う。正徳本には「譯一釋」(M. vol.1 p.7v l.3) との、『大正蔵』には「譯=釋^⑧」(T.40 no.1818 p.786 n.16) との注記がある。『統蔵経』・『新統蔵』には前注に「譯一作釋下同」(D.1-74-2 p.151rb l.4; X.46 no.789 p.731 n.14) との注記がある。
- (96) 乙本 (O. vol.1 p.8r l.7) は破損のため、「但牒」を欠く。
- (97) 甲本・乙本には「衆分經」(A. vol.1 p.8r l.3; O. vol.1 p.8v l.1) を欠くが、甲本には「衆分經」との添字があり、甲本・乙本以外の諸本には「衆分經」(M. vol.1 p.7v l.4; D.1-74-2 p.151rb l.9; T.40 no.1818 p.786c l.11; X.46 no.789 p.731c l.6) とあるのに従う。
- (98) 乙本 (O. vol.1 p.8v l.1) は破損のため、「囑」を欠く。
- (99) 甲本・乙本には「分」(A. vol.1 p.8r l.4; O. vol.1 p.8v l.1) とあるが、甲本には「即」との校正があり、甲本・乙本以外の諸本には「即」(M. vol.1 p.7v l.5; D.1-74-2 p.151rb l.10; T.40 no.1818 p.786c l.12; X.46 no.789 p.731c l.7) とあるのに従

う。

- (100) 乙本 (O. vol.1 p.8v l.1) は破損のため、「牒經序」を欠く。
- (101) 甲本・乙本には「分」(A. vol.1 p.8r l.4; O. vol.1 p.8v l.1) を欠くが、甲本には「分」との添字があり、甲本・乙本以外の諸本には「分」(M. vol.1 p.7v l.5; D.1-74-2 p.151rb l.10; T.40 no.1818 p.786c l.12; X.46 no.789 p.731c l.7) とあるのに従う。
- (102) 正徳本・『統藏経』・『大正藏』・『新統藏』には、この箇所の前に『法華論』の「序品第一 如是我聞一時佛住王舎城耆闍崛山中」(M. vol.1 p.7v ll.6-7; D.1-74-2 p.151rb ll.11-12; T.40 no.1818 p.786c ll.13-14; X.46 no.789 p.731c ll.8-9) との文章が挿入されている。また、「留支訳」には「[●]妙法蓮華經序品第一 如是我聞一時佛[●]住王舎城耆闍崛山中。」^①【T.26 no.1519 p.1 n.6】「〔妙法蓮華經〕-[㊦]」^②【T.26 no.1519 p.1 n.7】「住=在[㊦]」(T.26 no.1519 p.1a ll.15-16) とあり、「摩提訳」には「[●]如是我聞。一[●]時佛住王舎城耆闍崛山中。」^①【T.26 no.1520 p.10 n.15】「如是前行宋本元本明本宮本俱有頂禮正覺海，淨法無爲僧，爲深利智者，開示毘伽典，祇虔牟尼尊，及菩薩聲聞，令法自他利，略出勒伽辯，歸命過去未來世，現在一切佛菩薩，弘慈降神力，願施我無畏，大悲止四魔，護菩提增長，十四句七十四字，次宋本元本宮本俱有妙法蓮華經序品第一之九字，明本作序品第一之四字」^②【T.26 no.1520 p.10 n.16】「時+ (婆伽婆)[㊦]」(T.26 no.1520 p.10c l.8) とある。乙本 (O. vol.1 p.8v l.2) は破損のため、「與大」を欠く。
- (103) 甲本には「衆」(A. vol.1 p.8r l.4) との添字があるが、甲本以外の諸本には「衆」(O. vol.1 p.8v l.2; M. vol.1 p.7v l.8; D.1-74-2 p.151rb l.13; T.40 no.1818 p.786c l.14; X.46 no.789 p.731c l.10) を欠くのに従う。正徳本・『統藏経』・『新統藏』には「丘下一有衆字」(M. vol.1 p.7v l.8; D.1-74-2 p.151rb l.13; X.46 no.789 p.731 n.16) との、『大正藏』には「丘+ (衆)[㊦]」(T.40 no.1818 p.786 n.18) との注記がある。
- (104) 乙本 (O. vol.1 p.8v l.2) は破損のため、「牒衆成」を欠く。
- (105) 甲本の「衆」(A. vol.1 p.8r l.5) には「衆」との添字があるため、甲本以外 (乙本は破損) の諸本には「衆」(M. vol.1 p.7v l.8; D.1-74-2 p.151rb l.13; T.40 no.1818 p.786c l.14; X.46 no.789 p.731c l.10) とあるのに従う。
- (106) 乙本 (O. vol.1 p.8v l.2) は破損のため、「也」を欠く。
- (107) 甲本・乙本には「論有三」(A. vol.1 p.8r l.5; O. vol.1 p.8v l.2) とあるが、甲本には「什譯經」との校正があるため、甲本・乙本以外の諸本には「什譯經有三」(M. vol.1 p.7v l.8; D.1-74-2 p.151rb l.13; T.40 no.1818 p.786c ll.14-15; X.46 no.789 p.731c l.10) とあるのに従う。
- (108) 乙本 (O. vol.1 p.8v l.2) は破損のため、「三人天」を欠く。

- (109) 甲本の「天」(A. vol.1 p.8r l.5)には「天」との添字があるため、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「天」(M. vol.1 p.7v l.9; D.1-74-2 p.151rb l.14; T.40 no.1818 p.786c l.15; X.46 no.789 p.731c l.11)とあるのに従う。
- (110) 乙本(O. vol.1 p.8v l.3)は破損のため、「今」を欠く。
- (111) 甲本には「衆」(A. vol.1 p.8r l.6)との添字があるが、甲本以外の諸本には「衆」(O. vol.1 p.8v l.3; M. vol.1 p.7v l.9; D.1-74-2 p.151rb l.14; T.40 no.1818 p.786c l.16; X.46 no.789 p.731c l.11)を欠くのに従う。
- (112) 正徳本・『統蔵経』・『新統蔵』には「以上一有衆字」(M. vol.1 p.7v l.9; D.1-74-2 p.151rb l.14; X.46 no.789 p.786 n.19)との、『大正蔵』には「(衆)′+以(願)」(T.40 no.1818 p.731 n.17)との注記がある。
- (113) 甲本・乙本には「衆」(A. vol.1 p.8r l.6; O. vol.1 p.8v l.3)を欠くが、甲本には「衆」との添字があるため、乙本以外の諸本には「衆」(M. vol.1 p.7v l.9; D.1-74-2 p.151rb l.14; T.40 no.1818 p.786c l.16; X.46 no.789 p.731c l.11)とあるのに従う。
- (114) 乙本(O. vol.1 p.8v l.3)は破損のため、「牒」を欠く。
- (115) 甲本の「衆」(A. vol.1 p.8r l.6)には「衆」との校正があるため、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「衆」(M. vol.1 p.7v l.10; D.1-74-2 p.151rb l.15; T.40 no.1818 p.786c l.17; X.46 no.789 p.731c l.12)とあるのに従う。乙本(O. vol.1 p.8v l.4)は破損のため、「衆」を欠く。
- (116) 甲本・乙本には「徳」(A. vol.1 p.8r l.7; O. vol.1 p.8v l.4)とあるが、甲本・乙本以外の諸本には「經」(M. vol.1 p.8r l.1; D.1-74-2 p.151rb l.16; T.40 no.1818 p.786c l.17; X.46 no.789 p.731c l.13)とあるのに従う。正徳本・『統蔵経』・『新統蔵』には「經一作論」(M. vol.1 p.8r l.1; D.1-74-2 p.151rb l.16; X.46 no.789 p.731 n.18)との、『大正蔵』には「經=論′(願)」(T.40 no.1818 p.786 n.20)との注記がある。
- (117) 乙本には「三」(O. vol.1 p.8v l.4)とあるが、乙本以外の諸本には「二」(A. vol.1 p.8r l.7; M. vol.1 p.8r l.1; D.1-74-2 p.151rb l.16; T.40 no.1818 p.786c l.18; X.46 no.789 p.731c l.13)とあるのに従う。甲本の「二」(A. vol.1 p.8r l.7)には「衆」との添字があるため、甲本以外の諸本には「衆」(O. vol.1 p.8v l.4; M. vol.1 p.8r l.1; D.1-74-2 p.151rb l.16; T.40 no.1818 p.786c l.18; X.46 no.789 p.731c l.13)とあるのに従う。
- (118) 甲本の「比丘」(A. vol.1 p.8v l.1)には「尼」との添字があるため、甲本以外の諸本には「尼」(O. vol.1 p.8v l.5; M. vol.1 p.8r l.2; D.1-74-2 p.151rb l.17; T.40 no.1818 p.786c l.19; X.46 no.789 p.731c l.14)とあるのに従う。甲本には「比丘」(A. vol.1 p.8v l.1)は踊り字となっている。

- (119) 甲本には「比丘」(A. vol.1 p.8v l.1) を欠くが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「比丘」(M. vol.1 p.8r l.2; D.1-74-2 p.151rb l.17; T.40 no.1818 p.786c l.19; X.46 no.789 p.731c l.14) とあるのに従う。
- (120) 乙本(O. vol.1 p.8v l.6) は破損のため、「比」を欠く。
- (121) 乙本(O. vol.1 p.8v l.6) は破損のため、「今」を欠く。
- (122) 乙本(O. vol.1 p.8v l.7 - p.9r l.2) は破損のため、「竝爲易解兼不歎德故也比丘中有六一標通號二唱數三明位四歎德五列名六總結今但列初四不列後二」を欠く。
- (123) 甲本の「二」(A. vol.1 p.8v l.4) には「也」との添字があるが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「也」(M. vol.1 p.8r l.6; D.1-74-2 p.151va l.3; T.40 no.1818 p.786c l.23; X.46 no.789 p.731c l.18) を欠くのに従う。正徳本・『統藏經』・『新統藏』には「二下一有也字」(M. vol.1 p.8r l.6; D.1-74-2 p.151va l.3; X.46 no.789 p.731 n.19) との、『大正藏』には「二+(也)′[Ⓞ]」(T.40 no.1818 p.786 n.21) との注記がある。
- (124) 乙本(O. vol.1 p.9r l.2) は破損のため、「號及」を欠く。
- (125) 正徳本・『統藏經』・『大正藏』・『新統藏』には、この箇所の前に『法華論』の「與大比丘衆萬二千人俱皆是阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫心善調伏人中龍應作者所作已辨離諸重擔速得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸」(M. vol.1 p.8r l.7 - v l.1; D.1-74-2 p.151va ll.4-8; T.40 no.1818 p.786c ll.25-29; X.46 no.789 p.732a ll.1-5) との文章が挿入されている。また、「留支訖」には「與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡無復煩惱。心得自在善得心解脫善得慧解脫。心善調伏。人中龍。應作者作。所作已辨。離諸重擔。速得已利。盡諸有結。善得正智心解脫。一切心得自在到第一彼岸。」(T.26 no.1519 p.1a ll.17-22) とあり、「摩提訖」には「與大比丘衆萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡無復煩惱。心得自在善得心解脫善得慧解脫。心善調伏人中龍。應作者作所作已辨離諸重擔。速得已利盡諸有結。善得正智心解脫一切。心得自在到第一彼岸。」(T.26 no.1520 p.10c ll.9-13) とある。
- (126) 乙本(O. vol.1 p.9r l.3) は破損のため、「六」を欠く。
- (127) 正徳本・『統藏經』・『新統藏』には「門一無」(M. vol.1 p.8v l.2; D.1-74-2 p.151va l.9; X.46 no.789 p.732 n.1) との、『大正藏』には「〔門〕′[Ⓞ]」(T.40 no.1818 p.786 n.22) との注記がある。
- (128) 甲本の「後」(A. vol.1 p.8v l.6) には「復」との校正があるが、甲本以外(乙本は破損)の諸本には「後」(M. vol.1 p.8v l.3; D.1-74-2 p.151va l.10; T.40 no.1818 p.787a l.2; X.46 no.789 p.732a l.7) とあるのに従う。乙本(O. vol.1 p.9r l.4) は破損のため、「後論」を欠く。

- (129) 正徳本・『統蔵経』・『新統蔵』には「後一作復」(M. vol.1 p.8v l.3; D.1-74-2 p.151va l.10; X.46 no.789 p.732 n.2) との、『大正蔵』には「後=復^(原)」(T.40 no.1818 p.787 n.1) との注記がある。ただ、正徳本の注記は、ここの「後」ではなく、同じ行にあるその前の「後」に対する注記である可能性がある。正徳本には明確な指示がないため、はっきりしたことはわからないが、甲本から推測するに『統蔵経』の注記の指示が誤っていたと考えられる。『大正蔵』・『新統蔵』は『統蔵経』の注記を踏襲している。
- (130) 正徳本・『統蔵経』・『大正蔵』・『新統蔵』には、この箇所の前に『法華論』の「菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉皆得陀羅尼大辯[●]財樂說[●]轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎以大慈悲而修身心善入佛慧通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生」^①【M. vol.1 p.8v l.6; D.1-74-2 p.151va l.13】「財明作才」【T.40 no.1818 p.787 n.2】「原本冠註曰財明作才」【X.46 no.789 p.732 n.3】「財明作才」^②【M. vol.1 p.8v l.6】「法上轉一無」【D.1-74-2 p.151va l.13】「轉一無」【T.40 no.1818 p.787 n.3】「〔轉〕-^(原)」【X.46 no.789 p.732 n.4】「轉一無」(M. vol.1 p.8v ll.5-9; D.1-74-2 p.151va ll.12-16; T.40 no.1818 p.787a ll.4-9; X.46 no.789 p.732a ll.9-13) との文章が挿入されている。また、「留支訳」には「菩薩摩訶薩八萬人。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉。皆得陀羅尼大辯才樂說。轉不退轉法輪。供養無量百千諸佛。於諸佛所種諸善根。常爲諸佛之所稱歎。以大慈悲而修身心。善入佛慧通達大智到於彼岸。名稱普聞無量世界。能度無數百千衆生。」(T.26 no.1519 p.1a ll.22-28) とあり、「摩提訳」には「菩薩摩訶薩八萬人。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉。皆得陀羅尼大辯才樂說。轉不退轉法輪。供養無量百千諸佛。於諸佛所種諸善根。常爲諸佛之所稱歎。以大慈悲而修身心。善入佛慧通達大智到於彼岸。名稱普聞無量世界。能度無數百千衆生。」(T.26 no.1520 p.10c ll.13-19) とある。
- (131) 乙本 (O. vol.1 p.9r l.5) は破損のため、「論」を欠く。
- (132) 甲本の「釋」(A. vol.1 p.8v l.7) には「明」との校正があるが、甲本以外の諸本には「釋」(O. vol.1 p.9r l.5; M. vol.1 p.8v l.10; D.1-74-2 p.151va l.17; T.40 no.1818 p.787a l.10; X.46 no.789 p.732a l.14) とあるのに従う。
- (133) 甲本には「各」(A. vol.1 p.9r l.1) とあり、乙本には「有」(O. vol.1 p.9r l.5) とあるが、甲本・乙本以外の諸本には「爲」(M. vol.1 p.9r l.1; D.1-74-2 p.151va l.18; T.40 no.1818 p.787a l.10; X.46 no.789 p.732a l.15) とあるのに従う。正徳本・『統蔵経』・『新統蔵』には「爲一作各一作有」(M. vol.1 p.9r l.1; D.1-74-2 p.151va l.18; X.46 no.789 p.732 n.5) との、『大正蔵』には「爲=各^(原)、有^(原)」(T.40 no.1818 p.787 n.4) との注記がある。
- (134) 正徳本・『統蔵経』・『大正蔵』・『新統蔵』には、この箇所の前に『法華論』の「論

- 曰此●經法門●中初第一品●示現七種功德成●就」❶【M. vol.1 p.9r l.2】「經字一無」【D.1-74-2 p.151vb l.1】「經中二字一無」【T.40 no.1818 p.787 n.5】「〔經〕[′]－[Ⓞ]」【X.46 no.789 p.732 n.6】「經中二字一無」❷【M. vol.1 p.9r l.2】「中字一無」【D.1-74-2 p.151vb l.1】「經中二字一無」【T.40 no.1818 p.787 n.6】「〔中〕[′]－[Ⓞ]」【X.46 no.789 p.732 n.6】「經中二字一無」❸【M. vol.1 p.9r l.3】「示現二字一作明字」【D.1-74-2 p.151vb l.1】「示現二字一作明」【T.40 no.1818 p.787 n.7】「示現＝明[′]Ⓞ」【X.46 no.789 p.732 n.7】「示現二字一作明」❹【M. vol.1 p.9r l.4; D.1-74-2 p.151vb l.2】「就下一有此義應知四字」【T.40 no.1818 p.787 n.8】「就＋(此義應知)[′]Ⓞ」【X.46 no.789 p.732 n.8】「就下一有此義應知四字」(M. vol.1 p.9r l.2; D.1-74-2 p.151vb l.1; T.40 no.1818 p.787a ll.12-13; X.46 no.789 p.732a l.16) との文章が挿入されている。また、「留支訳」には「釋曰。此經法門。初第一品示現七種功德成就。」(T.26 no.1519 p.1a l.29 - p.1b l.1) とあり、「摩提訳」には「●此法門中初第一品示現七種功德成就。」❶【T.26 no.1520 p.10 n.17】「此法門中＝釋曰此法門[Ⓞ]」(T.26 no.1520 p.10c ll.19-20) とある。
- (135) 甲本・乙本には「名」(A. vol.1 p.9r l.2; O. vol.1 p.9r l.6) とあるが、甲本・乙本以外の諸本には「通號」(M. vol.1 p.9r l.3; D.1-74-2 p.151vb l.2; T.40 no.1818 p.787a ll.13-14; X.46 no.789 p.732a l.17) とあるのに従う。正徳本には「通號二字一作名字」(M. vol.1 p.9r l.6) との、『続蔵経』・『新続蔵』には「通號二字一作名字」(D.1-74-2 p.151vb l.2; X.46 no.789 p.732 n.9) との、『大正蔵』には「通號＝名字[′]Ⓞ」(T.40 no.1818 p.787 n.9) との注記がある。
- (136) 乙本 (O. vol.1 p.9r l.7) は破損のため、「顯道」を欠く。
- (137) 甲本には「一」(A. vol.1 p.9r l.3) は踊り字となっている。
- (138) 乙本には「餘」(O. vol.1 p.9v l.1) を欠くが、乙本以外の諸本には「餘」(A. vol.1 p.9r l.4; M. vol.1 p.9r l.6; D.1-74-2 p.151vb l.5; T.40 no.1818 p.787a l.16; X.46 no.789 p.732a l.20) とあるのに従う。
- (139) 乙本 (O. vol.1 p.9v l.1) は破損のため、「壞故」を欠く。
- (140) 乙本 (O. vol.1 p.9v l.2) は破損のため、「就」を欠く。